二小だより

No.9(１０月号)
令和８年　９月１７日
武蔵野市立第二小学校

イメージする力

校長　松　原　　修

学校の正門から職員玄関まで、ほんの 14 メートルほどでしょうか。

その日も私は、松葉杖をついて歩いていました。正門を入るとき、登校してくる男の子の姿が目に入りましたが、少し離れていたので、挨拶をするにはまだ遠い距離でした。



私がようやく職員玄関の前まで来たとき、その子が走ってきて、すっと玄関の扉を開けてくれました。「ありがとう」と声をかけると、その子は「足の具合はどうですか」と私を気遣ってくれました。そして、私が玄関の中に入るのを見届けてから、静かに扉を閉めました。

正門から職員玄関まで歩くことも、少し重い扉を開けることも、６年間、一度も苦にしたことはありませんでしたが、松葉杖で生活するようになって初めて、それらが想像していた以上に大変なことだと分かりました。

これまで私は、「相手の立場になって考えてみよう」と、子どもたちに話すことがよくありました。しかし、実際に自分が経験してみなければ分からないことがあると、今回身をもって感じています。

一方で、経験したことがあれば、相手の立場や気持ちを理解できるのでしょうか。それも決して簡単なことではないように思います。

私たち大人は、誰もが子ども時代を過ごしています。けれども、それだけで今の子どもたちの気持ちを理解できるわけではありません。私たちが子どもだった頃と比べ、子どもたちを取り巻く環境は大きく変わっています。そして何より、子どもたちは一人一人違います。同じ時代を生き、同じような経験をしていたとしても、感じ方や受け止め方は、それぞれ異なるはずです。

大切なことは、「自分もそうだったから分かる」と決めつけることではなく、目の前にいる相手が今、何を感じ、何に困っているのだろうと、想像してみることなのでしょう。

「イメージする力」というタイトルにしましたが、何か特別な能力のことではありません。

目の前の人の様子をよく見て、その人の立場に思いを寄せること。自分とは違う感じ方や考え方があることを想像すること。そして、「もしかしたら、困っているかもしれない」と、一歩先まで考えてみること。

あの日、男の子が玄関を開けてくれたのは、私が松葉杖をついている姿を見て、「大変そうだな」と想像したからでしょう。そのさりげない行動から、私は大切なことを教えてもらいました。

私自身も目の前にいる人に心を寄せ、「この人は今、どんな気持ちなのだろう」と想像できる人でありたいと思います。